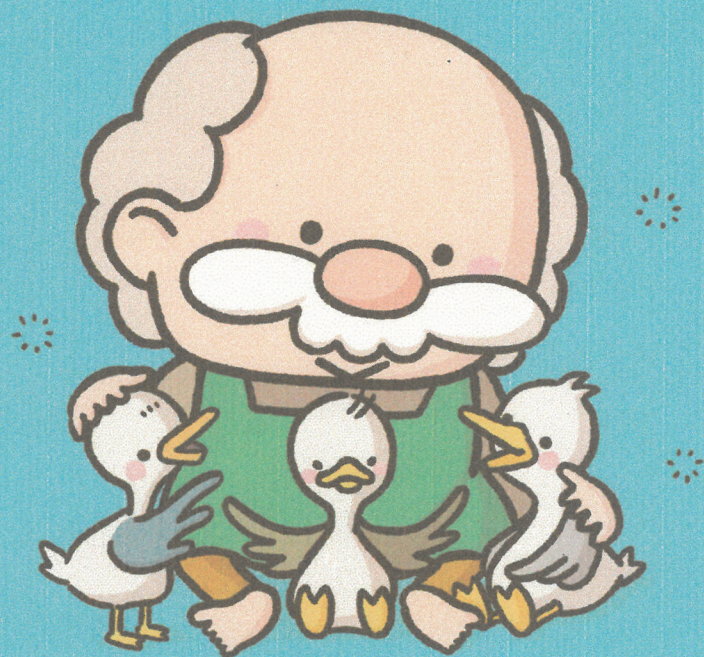


やくそくの片葉



さく・え キダコウジ

やくそくの片葉

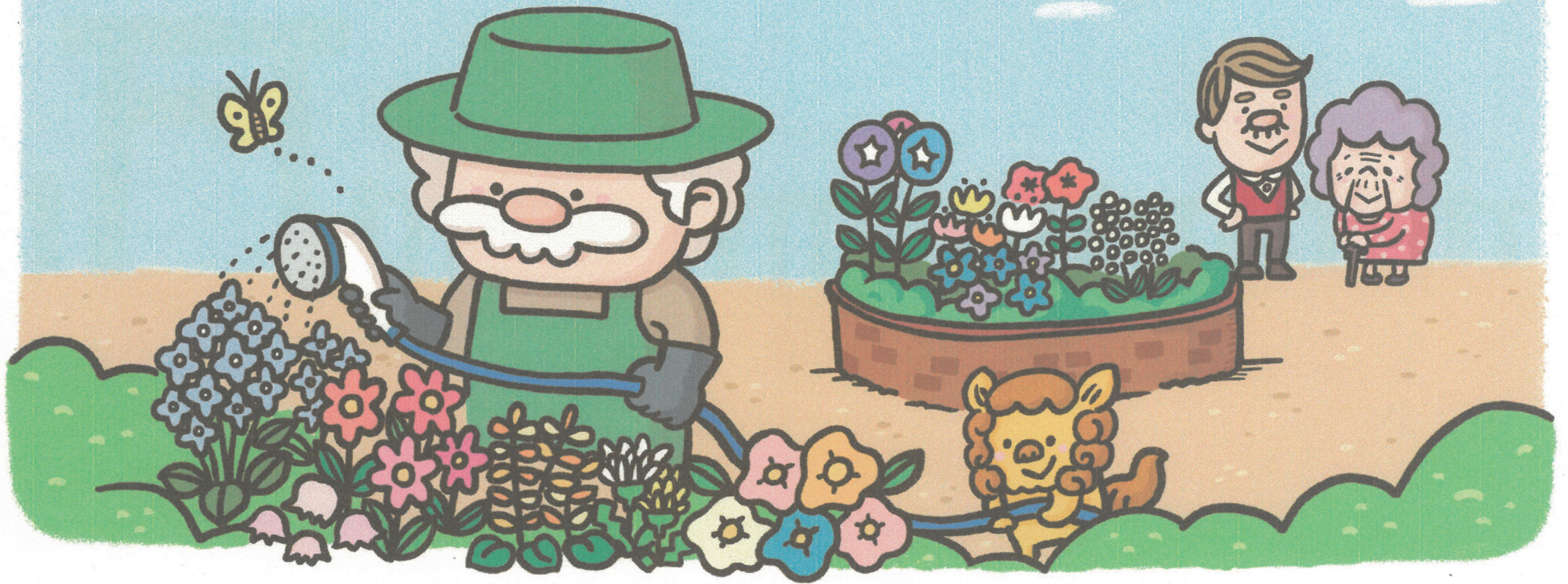
さく・え／キダコウジ



井手の神様は、お庭造りが大好きで、
毎日せっせと草木の世話をしていました。

季節ごとの花が咲くように、土を耕し、水をやり…。
井手の神社はその美しさで村の人から愛されていました。

「今年も見事な花やなあ。」
「そうか、もうこんな季節になったか。」
といて、村の人が集まるのが神様はうれしくて誇らしかったのです。



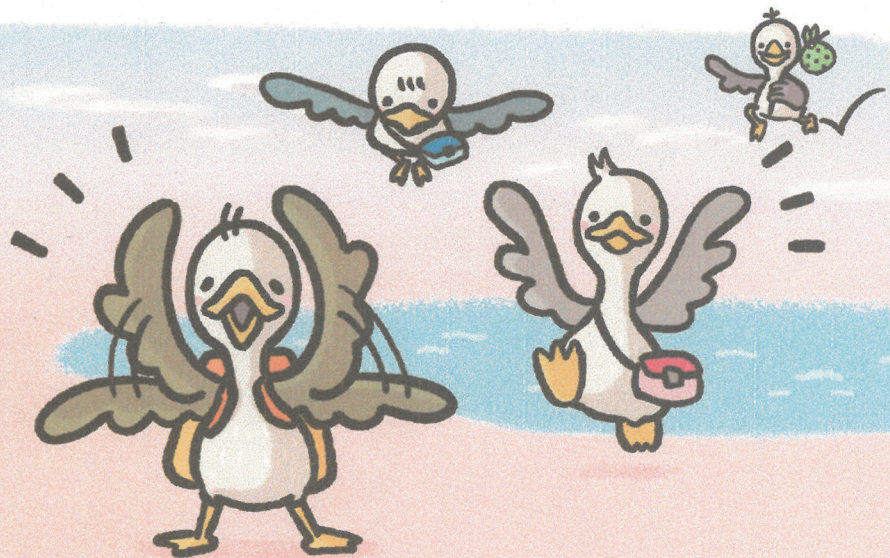


冬になると、お花は咲かなくなり、
人々が神社に来ることも少なくなりましたが、神様は冬が大好きでした。
冬には特別なお客様が訪ねてくるのです。
ひときわしんと静まり返った明け方、
遠くのほうから不思議な音が聞こえてきます。



神様は、はっと目を覚まします。
「きなすったか。」





お宮からだと、遠い空に懐かしい顔ぶれが見えます。

「おーい、おーい」

声をかけると、鳥たちは神様より大きな声で返事をして、

こちらに向かってくる速さも一層増します。



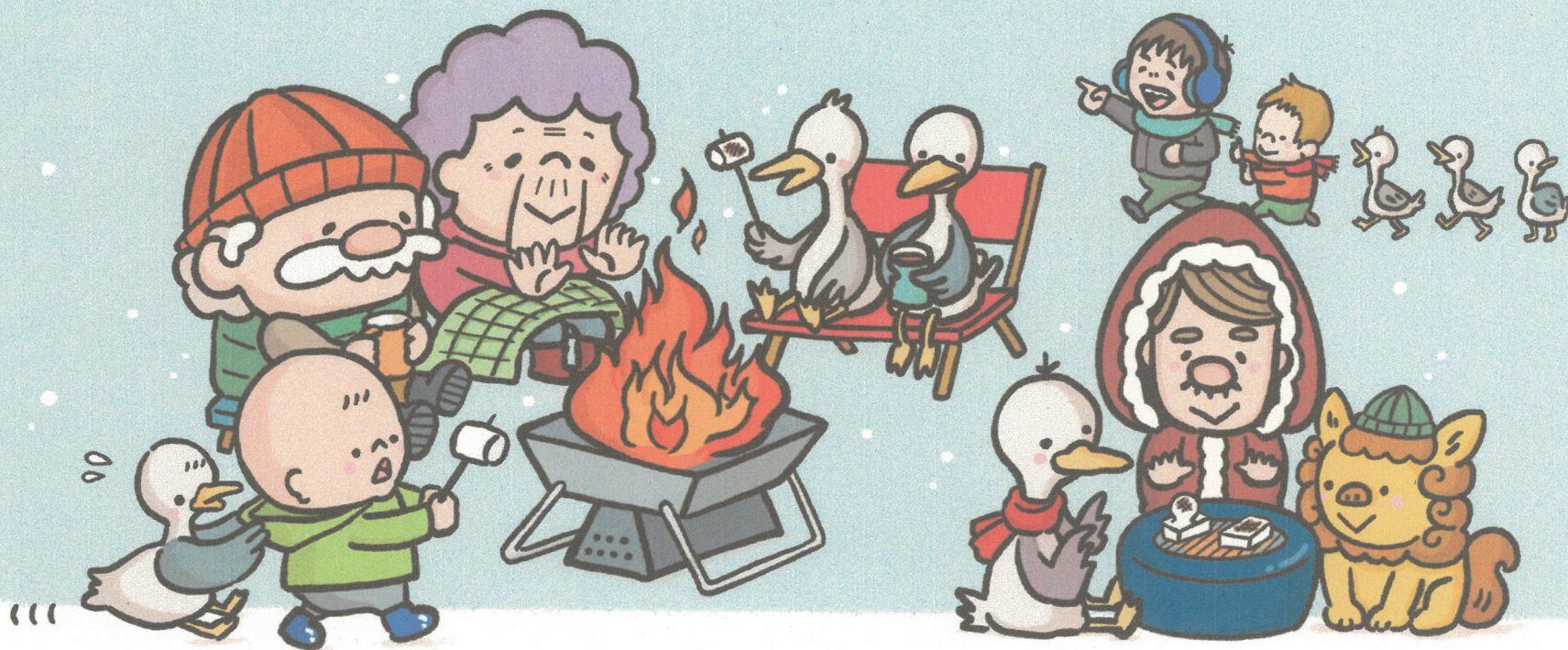
鳥たちがお池につくと、すぐに神様のもとに駆け寄り
「神様、お久しぶりです。今年は風が強くて、ここまで来るのに難儀しました。
今年ここに来られたのは去年より少ないんです。
だけど、またお会いできた。嬉しいです。」

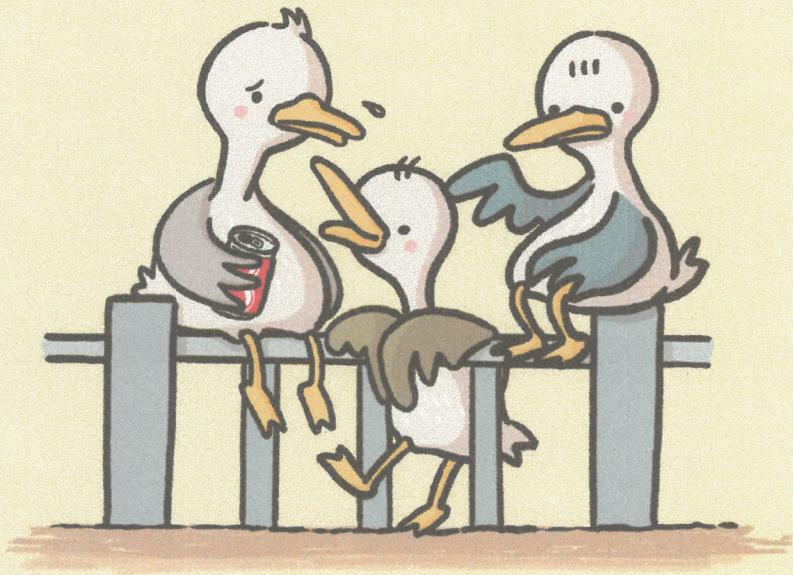


「大変やったな。疲れとるやろう。ゆっくり休みなさい。」
鳥たちは、水浴びをしたり、
神様が用意してくれたごちそうでお腹を満たし、疲れた体を癒しました。

それから冬の間、神様と鳥たちは毎日のように語りました。
旅先で出会った美濃へ行く群れの話。異国での生活の話、異国のお庭の話…。
話題は尽きず、鳥たちが話す声は一冬続きます。

村の人たちも鳥たちの楽しそうな話し声を聞いて、
雪がしんと降る中、ひとり、また一人と集まり、冬の訪れを感じます。
「もうこんな季節やな。今年も元気そうやわ。」と、とっても嬉しそうです。





鳥たちは一冬休むと、また遠い遠い故郷に帰らなければなりません。
しかし、十分に休んで元気になっても、厳しい旅で命を落とす者は少なくありません。
「もうすぐ出発だね。」
「もう少しここに居たいな。また来年もここに来られるかな。」



出発の日が近づくと、この心地良い池から去るのが名残惜しくなります。
神様も同じように、鳥たちと別れがたく、
さみしさが日に日につのっていきます。

出発の日の前日、鳥たちは神様にひとつお願いをしました。

「長旅のお守りにこの池の葦をくださいませんか。」

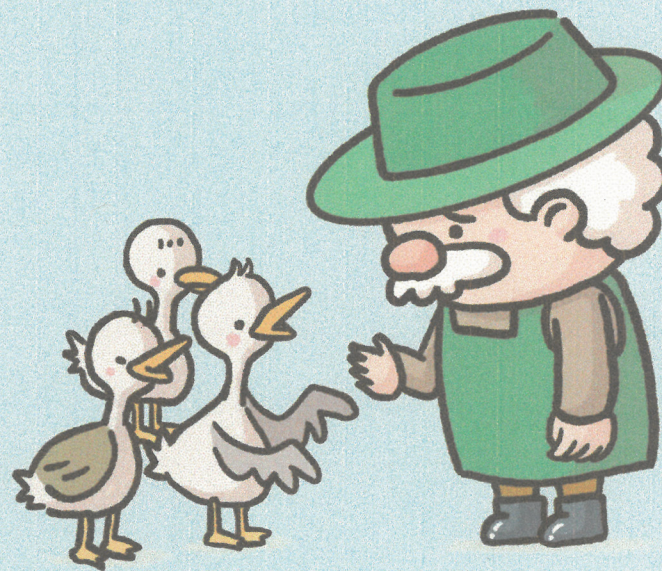
きっと来年もこの神社に戻ってきます。」

神様は思い出します。

また来年続きを聞かせてくれよ、と約束したのに会えなくなってしまった友達。

「葦は、あげられんよ。大事に育てたものだからね。生かしておかないかん。」

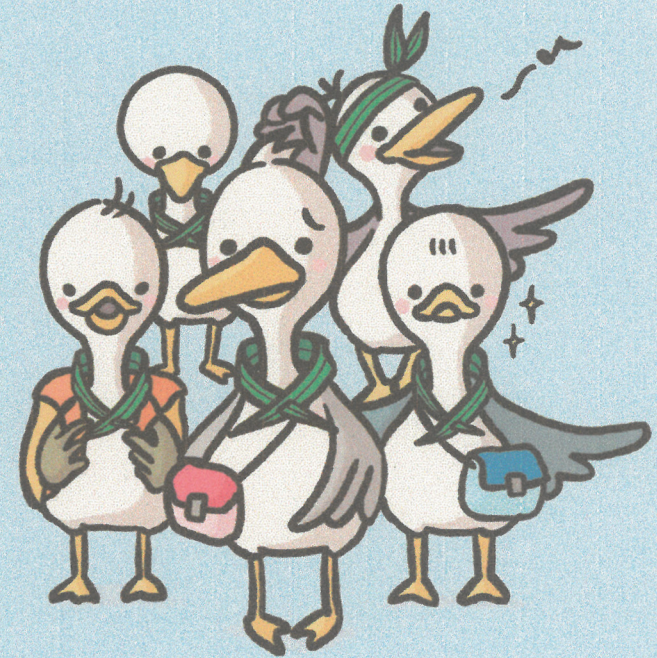
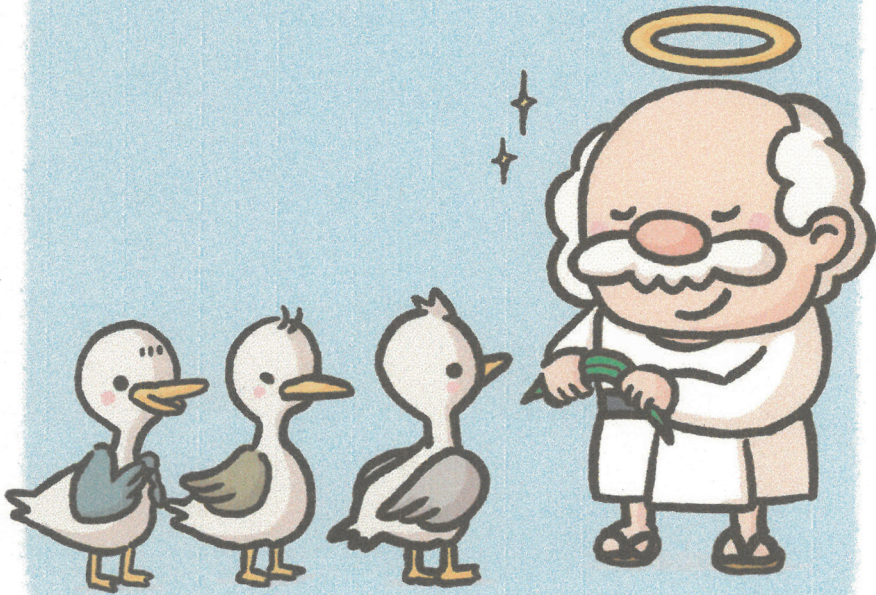
鳥たちは落ち込みます。葦があれば、きっと頑張れると思ったのに。



神様は続けます。
「だから、葦の片葉を1年貸してやる。
わしと葦はここでずっと待っているから、
きっとまた来年返しに来るんだよ。」



出発の日、一羽一羽に葦の片葉を預けます。
神様は来年も会えるように願いを込めて。



「それでは行ってまいります！」
「きっとまた来年、あの話の続きを聞かせてくれよ。気をつけてな！」
鳥たちは力強く旅立っていきました。

いつも片葉の葦ですが、冬によく見てみると、
葉っぱが戻った葦が見られるかもしれませんよ。



おしまい